

教 仏 名 聞

第50号
(発行日)
2014年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

清浄光明ならびなし

清浄光明ならびなし
遇斯光のゆえなれば

一切の業繋ものぞこりぬ
畢竟依を帰命せよ

(現代語意識)

(清浄な弥陀の光明には対比するものとははない、この光に値偶すればこそ、すべての繋縛も除かれる。究竟の依りどころたる弥陀をたのため)

* * * * *

このご和讃は曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』の一節を親鸞聖人が和讃にされたものです。阿弥陀仏の光明にあえば、すべての束縛が取りのぞかれる。その阿弥陀仏をたのみなさいという内容のご和讃です。このご和讃の「遇斯光のゆえなれば」の遇斯光とは、遇斯光という光のことではなくて、「斯の光に遇う」という意味です。清浄の光明である阿弥陀仏の光明に遇えば、浄土に生まれて仏になり、一切の業繋すなわち束縛が除かれるのであると、こう仰せられるのであります。仏になる

と、迷いから起こる一切の束縛(繋縛)がなくなるのであります。

ですから、一切の束縛から解放されるのは浄土に生まれ

て仏になった時であります。では、この世では阿弥陀仏にであつても、業繋の苦しみは取りのぞかれないのであるうかという

と、阿弥陀仏の光明には私たちが仏にして一切の束縛から解放して下さる功德がこもっていますから、この世の人生生活にもその功德が私たちの人生生活の上に影を落として下さる。浄土に生まれる前の、この世において、「一切の業繋のぞかれる」という意味に連なる恵みが与えられるのであります。

そういう恵みを『歎異抄』では「無碍の一道」といわれております。無碍の一道とは、「障りだらけの人生において、なお障りをこえて生きることが

できる道、それがお念仏をいただいた人生である」と教えられております。「一切の業繋のぞかれる」という功德は、この世では、「無碍の一道」を歩ませていただくという恵みとして与えられると言っているのであります。

「一切の業繋」といわれる業繋とは、自らの過去の業(行為)の結果としての束縛という意味でしょう。業繋とは業による繋縛という意味です。過去の業の結果が現在の繋縛になるということですが、

それは悪業であり罪業を意味してあります。過去になした悪業とか罪業が、現在に結果して業繋(束縛)となつて現れるのであります。

そこで、過去の業の結果はどこに一番現れるのでしょうか。いや、どこに一番感じられるのかと言った方がいいかもしれません。

それは先ずは私たちの身心

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(月)

午後二時始

ご講師

芦屋市

片岡 雅子 先生

*なおお十二月二十一日は午前十時より
勤行・法話(念佛寺住職)があります。

ではないでしょうか。この身心は過去の業の結果として受けたのだと仏教では教えられています。この世に生まれる前に為してきた行い、それが過去の業であり、その結果としてこの世で人としての身心を受けたのであると、かよにお聞きするのであり、又、実際そう感じるのであります。

仏教は、外の事象の説明ではありません。仏の教えはまず自分自身の上に聞き、感じとる教えです。

過去世が本当にあるのだらうか、あるいは過去世で私は一体どんな行いをしてきたのかなど、いろいろ疑問が湧くかも知れません。そういう疑問はあつても、仏の教えを我が身に引き当てて、「私がどう思うかはしばらく傍らにおいて、仏様のおっしゃる

ことを素直に聞いてみよう」と思つて、素直に受け入れていきますと、現在の人生に深く豊かな意味が次第に開けてまいります。

仏の教えを聞く中で、自らの過去の悪業、罪業が現在の身となつて報い現れていると感じられてきますが、こうした身を「宿業の身」ともいいます。宿業の身にさまざまな束縛が起こってきます。それを「一切の業繫」と言われるのではないのでしょうか。

たとえば歳をとり老化するという束縛は、どうして起こるのかというと、人としての身(身心)として生まれたからでしょう。この身は老化するという束縛(業繫)を受けざるを得ない。あるいは病苦に悩まされるといふのもやはりこの身を受けたから、病いという束縛(業繫)を受けねばならず、死なねばならないという束縛もこの世に人身として生まれたというところにある苦でありましょう。

この苦も業報としての身を受けたからとも言えましょう。また暑さ寒さの苦、環境の悪化から来る苦しきも業報の身における束縛であります。

以上は外からの業繫ですが、業報によつて受けた身心で、心の中からの業繫もあります。それは貪りとか怒りとか憎しみとか妬みとかこだわりなどの煩惱であり、さまざまの煩悩に縛られている私たちです。要するに、内外における「一切の業繫」はこの身心において起こる苦しみであると言えますでしょう。この身心に起こる苦において、宿業の身の罪業を感じざるを得ないのであります。

しかし、畢竟依(究極のよりどころである阿弥陀仏)に帰命する、ここでは清浄光明にであうと、さまざまの業繫があるにもかかわらず「業繫がのぞこりぬ」といい得るような意義があるとすれば、それはどういふことでしょうか。

それは業繫はありながら、行き詰まらない道つまり「無碍の一道」をたまるからであります。さまざまの障り、すなわち業繫がどこまでもあるにもかかわらず、なお「無碍の一道」すなわち「さわりな

き道」をいただく。

そこに「一切の業繫ものぞこりぬ」という功德が、仏になる前、この世に生きている時から、すでにその功德が人の一生に作用して下さるのであります。

阿弥陀仏の光明に遇うなら、無碍の一道というような意味がどうして開かれるのでしょうか。さまざまの束縛、いわば苦しきから解放されていくような道がどうして可能なのでしょうか。

この世にいる限り、この身を持つている限りさういふことはありえない、というのも事実でしょう。苦しきのない人は一人もいないし、実際の日々は妨げや束縛だらけの日々ですから。

ところが、光明無量であり寿命無量の阿弥陀仏にであうと、業繫の身(身心)から解放されている事実にあうのであります。それはどういふ事実かという点、業繫の身であるにもかかわらず、阿弥陀仏が私とともに今ここにまします」といふ(事実)です。(阿弥陀仏が私とともにいたもう)という一点がいつでもどこでもすでに与えられている、そのことが南無阿弥陀仏を聞く

ところに知らされるのです。

阿弥陀仏がいなさらぬ場所はなく、阿弥陀仏がおられない時はないのであります。

阿弥陀仏の光明にあうと、その阿弥陀仏に撰取されるのです。阿弥陀仏が私の土台となり、支えとなり、私と離れなくなつて下さるのです。

ただその阿弥陀仏に気がつかないと、阿弥陀仏が私の主であり、私と一体になつて下さつていふことが知られない。知られないから、業繫の身心が「私」であるという見方しかできません。そうすると、私の身心を束縛する業繫の苦しみにふりまわされてしまうのであります。

ところが阿弥陀仏の光明にであいますと、阿弥陀仏が私とともにいたもう、阿弥陀仏の方が私の主体である、いわば阿弥陀仏こそ私の「いのち」になつて下さつていふことが、知らされます。

この大事な一点を、曾我量深先生は「如来、我となつて我を救いたもうなり」と仰せられています。本当にその通りですね。「如来が我となりたもう」さういふ私を知らされるのです。

それはたとえほのかであつても、知らされるのです。そ

ういう「いのちの我」は業繫の身心の私を超えている「いのち」です。

自分の身心を超えている「いのち」を知らされますと、業繫の身心にのみ固着し、縛られていた状況から解放されていくという功德があらわれてまいります。それは浄土でいただくような完全な解放では勿論ないでしょう。しかし、さわりだらけの人生生活にあつて、なお「業繫の身心」つまり「一切のさわり」を外にみる眼が与えられます。それが無碍の一道といわれる自由であります。

さわりだらけの業繫の身心をなお外に見る眼、それが信心の智慧です。それが与えられますと、それは、外は暴風であつても、台風の目のように晴れている一点ですから、そこはまさに一切の業繫が除かれていふ場所なのです。さまざまの業繫の苦しきは暴風驟雨(激しいにわか雨)のごとくでありましても、阿弥陀仏が「今ここに私とともにいたもう」といふ現在只今の場は、束縛から開放されている場なのです。ですから苦しきや悩みや煩いはいろいろあります。まして、なお心の底は明る

いといえるのです。

難しいようなことを書きましたが、なにも難しいことではありません。南無阿弥陀仏と称え、南無阿弥陀仏と耳に聞く。その南無阿弥陀仏は、阿弥陀仏が「ここにいます。お前を抱いている。引き受けています」との仰せであります。その仰せを聞いていとう、ごく単純なことなのです。

この南無阿弥陀仏を忘れると暴風に巻き込まれ、苦しみがおそいかかってくる。しかし、南無阿弥陀仏を聞く、そこに、今ここに如来様がいて下さり、「阿弥陀仏はお前を引き受けている。お前はここにいていい」と仰せ下さっているのです。お念仏を聞くそのつど、「ほつと」この場におらせていただけるのです。この場所は業繋の身心に即しているながら、私の身心を超えている、有難い場所なのです。

〈畢竟依〉というのは、弥陀の光明は究極のよりどころであることを示された名で、阿弥陀仏のことでもあります。この世のさまざまより処、それは財産であったり、健康であったり、子供であったり、会社であったり、才能であったり、学問であったりします。

それらは確かに私たちのより処でしょう。

しかし限界があります。それらは仮のより処にはなりません。縁が来ると離れてしまいます。

貯めたお金は縁がくればなくなってしまう。健康は縁がくれば病気になる。子供は縁がくれば遠くに離れたり、時には先に亡くなったります。才能は病気になるれば生かすことができません。学問教養は認知症になれば役に立ちません。

しかし、阿弥陀仏は私を一瞬も離れずに、私の身心を超えて私を支え、私を掴んで下さっている用きですから、これは壊れない究極的なより処です。それで阿弥陀仏のことを〈畢竟依〉と讃えられているのであります。その南無阿弥陀仏に「帰命せよ」、「よりかかりなさい」「たのみなさい」とお勧め下さっているのです。

(了)

【信心夜話】

座談会をすると、いろいろな質問を受ける。その中で多いのが「私は求める心が弱い。だからいつまでも信心が得られない。どうしたらいいか」という問いである。

たしかに、大経にも釈尊が「たとい世界に満てらん火を、必ず過ぎてもとめて法を聞かば、かならずまささば成ずべし、広く生死の流を度せん」と仰せられ、大火が燃えさる世界の中を過ぎていくような志で法を求めるなら、かならず仏道を成就する、と説かれていた。また名師と言われた香樹院講師は

「これ一つ聞きつけずば置くまいの心がゆるんだら、仏になる種を失うたと思え」とまで言っておられる。

こういう話を聞くと、「私はいかにこの強い聞法求道の心がない。これだから私はダメだ」と嘆くことになるのである。

しかし、「法をいただきたくとも、私は求める心が乏しい」と嘆いているという事は、求める心がある証拠である。求める心がある限り、法が与

えられる縁はすでに今来ているのである。なぜなら求めていた法は今すでに一切衆生に、今の私に既に回向されているからである。その証拠が念仏となつて私の口から出て下さっている。すでに与えられている法をそのまま「こんな私のためでしたか」と受け取るばかりなのである。

にも関わらず、今すでに与えられている法の方を見ずに、いつまでも「私は求道心が乏しいからダメだ、ダメだ」と自分の方ばかりを見ているから、それこそいつまでたつても法をいただけぬのである。自分を嘆く前に、そのような求道心のないような自分の処にまで、「助けるのは弥陀の仕事である。そのまま称えるばかりでよい」とまで仰せ下さり、南無阿弥陀仏となつて寄りそいたもう広大な大悲を仰ぐことこそ肝腎である。

松並松五郎師にこんな話がある。ある真宗の寺の住職さんが松並師に

「私は仕合せなくめで、今日まで生かされてきたから、世間並みの人々の如く、後生の一大事は、全く気にもかけなかった。こんな事でよいのか」と尋ねられた。そしたら松並師は

「御院主様、そんな事どうでもよろしいやないですか。我々は、後生一大事と思つたことですが、それも合間に思ひ出すことですがな。〈お阿弥陀様〉は、久遠劫の昔より、私の後生の一大事を、み心にかけてさせられて、すでに〈南無阿弥陀仏〉に成り給うたではありませんか。もう〈南無阿弥陀仏〉の中に、私の後生の一大事は、すでに成就し上げてあります。今さら何を言いなさる。おそすぎますがな。〈お阿弥陀様〉が私の後生一大事でありましたのやがな。南無阿弥陀仏。それそれ呼んでござるがな。聞えますがな。南無阿弥陀仏」とお答えになった。

阿弥陀仏は「汝はまだ後生が一大事なつておらぬから助けぬ」とは仰せられていないし、「汝は求道心が乏しいからダメである」とも仰せられない。どのような有様の私であろうとも、「そのままなりを助ける」と喚びつめに喚んで下さっているのである。自分の有様を嘆く前に、自分にふりそいで下さっている阿弥陀様の大悲のご親切を今いただくべきである。

(了)



木村無相さんの法信 26

(昭和五十八年九月八日のお便りの続き。無相さん七九歳。亡くなられる四ヶ月前のお便り)

さて、今回の紀さんの手紙、八枚。受取りました。

ありがとうございます
「仏智疑惑」を中心にこれだけアリノママを書いてくれて。

○
「小生、今年六月頃より、何か今までのハレモノが引いたように聞法上の苦がなくなっ
てしまいました。信心が得たい、ハッキリさ
せたいと焦り、もがき、もだえていた気分が
無くなってしまったようでありませぬ。将来、
又、もがき苦しむかもしれませぬが」とのこ
と。

○
「将来、又、もがき、苦しむかも知れませ
んが」とあるが、それは、又、その時のこと、
今、そうでなければいいではありませんか。
ただし、オタガイ、凡夫というものは、「よ
ろづのこと、ミナモテ、ソラゴト、タワゴ
ト、マコトあることなし」で、ナニが、イツ、
ドウカワルか、わからないので、ナニがドウ
アツテモ、チョットモアテにはならないこと
ですよねエ。

「因縁次第」でどうにでもかわってゆく。
ワレワレのイワユル「ココロ」というもの
は、「オモイ」というものは、チョットモ、「ア
テ」にならない。

今、「苦がない」と思っていたら、又、苦が

出てくる。

このオタガ
イの「ココロ」
「オモイ」と
いうものはチ
ョットモ「ア

テ」にならぬ。「マコトあることなし」だから、
香樹院師が

往生一定と言うも凡夫の思い、

往生不定と言うも凡夫の思い、

その二つをすててミダをタノムのじゃ

と仰せられるのでしょうか。

ワレワレ凡夫が

信じたと思つても、

これでこそ往生出来ると思つても、この凡

夫の思いというものは、固定的でなく、又、

かわるからアテにはならない。

ウタガツテイテモ、又、信じたような気持

ちになり、大丈夫なような気持ち、思いにな

ったりするので、ワレワレオタガイの、凡夫

の、「思い」、凡夫の「カンがえ」、凡夫の「感

じ」として、

往生一定と思ひ、

往生不定と思つても、

チョットモ「アテ」にはならない。因縁次

第でどうにでもスグかわる「ココロ」だから

であり、「思い」だから、それで

往生一定と言うも凡夫の思い、

往生不定と言うも凡夫の思い、

そうした凡夫の思いをタノミにすること、

凡夫の思いをば、

ヨロズノコト、ミナモテ、ソラゴト、タワゴ

ト、マコトアルコトなし

と、見すてて、タダ、タノムベキは如来であ

る。「タダ、如来をタノミにせよ」と香樹院師

は仰せられるのであろう。

ただ念佛のみぞマコトにておわします

であろうから。

○

さて、そこで、往生一定と思うも、凡夫の「ア
テにならぬ思いにすぎなく、往生不定と思
うのも、凡夫のカワリヤスイ「思い」のヒトコ
マにすぎないから、そうした凡夫の思いにコ
ダワルココロ、思いに相手にならず、

ミダをタノム

というが、それなら、この場合の「ミダをタ

ノム」とは、どうすることか、と言えは

「よき人の仰せ」

「ただ称えよ」

との如来のお勅命のまんまに

ただ、声に、口に

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

と称名念仏申す、称える――

自分の「ココロ」は、

信じようが、

信じまいが、

ウタガオウが、

ウタガイはれまいが

聞こえようが、

聞こえまいが、

そうした「凡夫のココロ」は、そのままにし

ておいて、相手にならず（相手にならずには

おれないとしても）それはそのまま、ただ

ただ

「よき人の仰せ」のままに、如来の

ただ念佛せよ

の「お勅命」のまんまに、

ただ声に、口に、

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

と称える

オーム念佛

発音念佛

することが、この場合、

ミダをタノム

ということでありましょう。

タノミ「ゴコロ」というような「凡夫の思
い」は、どうあると、

相手にならず、

ただ「仰せのまんま」に

口に、声に、

称名念仏申すこと、

これが

「ミダをタノム」

ということでありましょう。

○

往生一定というも 凡夫の思い

往生不定というも 凡夫の思い

この二つをすてて ミダをタノムのじゃ

との香師のオサトシ。言いかえると、

往生一定と思うなら、往生一定と思う思い

を御えんとして

ただ念佛せよ、

往生不定と思うなら、往生不定と思う思い

を御えんとして

ただ念佛申せ

大切なことは、如来・聖人の仰せのまんまに

ただ念佛申す

ということが大切なことであるのだよ、

信じられたとか

信じられぬとか

うたがわれてならぬとか

ウタガイ晴れたとか

聞こえたとか

聞こえませぬ

とかいう「凡夫の思い」「凡夫の心」に関する

ことは、

往生の用はないぞよ、

ただ念佛のみぞ往生の道にてまします

ただ如来・聖人の仰せのみぞ、白道にてま

します マコトにておわします

ということではありませんまいか。

(続)

